

## 大分・天福寺奥院木彫群と九州の古代彫刻

### — 悉皆調査からの展望 —

末吉武史 (福岡市博物館)

天福寺奥院は大分県宇佐市の中心から 8 km ほど離れた黒地区に位置する岩窟寺院であり、内部には 8 世紀の塑造三尊像残欠のほか大小 70 軀余りの木彫像が伝えられてきた。像種は如来像や菩薩像、天部像など様々で、大半が内刳りを施さない一木造りという点で共通し、中には台座蓮肉と心棒を共木から彫出し、土製の螺髪を貼り付けるなど、著しく古様な技法を用いる像も含まれる。

これらの木彫群については、昭和 49 年に初めて本格的な調査を実施した久野健氏や八尋和泉氏らの先行研究があり、周辺の寺院の廃絶に伴って集まったもので、制作時期は概ね 10～12 世紀と考えられてきた。ただ、その後これを再考した渡辺文雄氏は 9～10 世紀とし、さらに近年では炭素 14 の年代測定や塑像との作風比較などから、多くが 8～9 世紀に遡るという新たな年代観も示されている。

これまで、九州における奈良時代の造像技法は塑像や銅像が主体であり、木彫像の出現は延暦年間に最澄が竈門山寺で造像した檀像薬師如来像まで待たねばならないと考えられてきた。しかし、近年では日本の本格的な木彫像成立は、檀像概念を巡る研究や樹種鑑定のデータ蓄積によって 8 世紀に遡ることが明らかにされ、地方における新出作例の報告も増加している。こうした研究動向を踏まえるならば、八幡信仰を核として奈良時代から中央との濃密な関係を保ってきた宇佐周辺では、唐招提寺木彫群の出現から時をおかずして木彫像の制作が始まった可能性は十分に考えられよう。

発表者はこれまでの研究の中で、九州の平安初期一木彫像には福岡・浮嶽神社如来立像のように直立して腰高の体形を示す一群が存在し、その中には福岡・長谷寺十一面観音菩薩立像のように「腰帛」と呼ぶ特殊な着衣を着ける菩薩形立像があることも明らかにしてきた。こうした地方様式が出現した背景については、地政学的な条件から大陸の影響を検討する必要もあるが、その一方で前代に淵源を求め、そこから様式展開を遂げた可能性も検討に値すると考える。

この度、発表者は上記の想定にもとづき天福寺木彫群と周辺堂宇の調査をおこなったところ、技法、像種、作風などに関する多くの知見を得た。特に用材がほぼカヤとみられる針葉樹であったことは代用檀像概念の地方への普及を窺わせ、作風の面でも浮嶽神社像と類似するものや「腰帛」をあらわす菩薩像も見出された。また、吉祥天とみられる天部像とともに僧形像が多数含まれていたことも八幡神像の成立を考える上で興味深く、地方の仏像史の枠に収まらない様々な課題が浮かび上がった。

本発表では制作時期や造像背景の結論を急ぐものではないが、調査で判明した諸点を整理し、九州における古代彫刻の成立と展開についての展望を述べる。